

医療事故を起こした人と・被害者のかけ橋となって

～医療で悲しむ人をなくすために～

豊田郁子さんに講義をいただいて

助産学分野 中島清美

今回豊田さんが尊い幼いお子様の命を亡くされてから、医療の現場で医療事故の再発を防ぐことと共に医療事故の犠牲となった患者支援と医療者側の支援に至る活動がされることになった経緯を知りました。

お子様の死を受け止める事さえも苦しく辛いことだとお察しいたします。その辛い状況下でおきた様々な理不尽な状況に驚きました。

そうか、そんな風に医療者ともボタンがかけちがっていくものなのかと思いました。

お話を伺いながら色々な方の涙が思い出され、その時々自分の関わりは正しかったらどうかと思い起こしたりしました。

医療現場に30年勤めてきた私にも、忘れる事の出来ない苦い経験があります。

20年以上前ですが、病棟の配属が変わって2週間ほど経過した頃でした。準夜勤への引き継ぎ時間で周りもとても忙しい時間帯に、医師が口頭で指示を出されました。私の受け持ち患者に使用するのはおかしい！と思う処方でしたので何度も患者の名前を確認し、指示書に記入してくださいと処置室まで追いかけて確認しましたが、医師は「いいからさっさとその通りやれ」といわれ、不安に思いながら患者さんに説明をして点滴から指示の投薬をしました。

心配でそのままとどまって1～2分ほどで患者さんが眠気を訴え、やはり変だと思い中止して医師に報告しました。「どの患者にいれたんだ！」と怒鳴られ愕然としました。「やっぱり・・・あーとんでもないことをしてしまった・・・」誤薬・・・そこから緊急に病棟会議が行われ、「肝機能が低下している患者に眠剤投与は禁忌だと知らないのか！」と全てが私の責任にのしかかり、返す言葉もなく「すこしねむいわ」と言った患者さんの容体だけが頭の中をめぐっていました。自分に看護師の資格はもうない。患者さんが無事であってほしいと願うばかりでした。

そんな窮地に立たされた時、ひとりの先輩看護師が、指示を出した医師に対し責任を問いただす発言をしたのです。

誰もいないと思っていた処置室でしたが、ちょうど準夜勤のためにNSステーションに来た彼女は何気なく私と医師のやりとりを垣間見たのでした。

そして偶然にも、彼女は私の看護学生の時の指導者だったのです。事態は彼女の発言により医師側も問題点を客観的に分析すること、チーム医療としてのルールの取り決めなど事故の再発防止に努める事にお互いが意識をもつ話し合いとなりました。

落ち込む私を師長が気遣い、週末の休みと指示あるまで休暇をとるよう言われました。いわば謹慎期間だろうと思い報告書を書いて何度も読み返しているうち自信を失

い、志半ばで看護の道を諦めなければならないできごとを整理できず、それでも人様の命をあずかる責任の重さに直面し、苦しくて辞表を書いたものの、心の行き場のない悲しいできごとでした。

しかし週明け早朝師長から電話があり、「白衣を着て病棟に来なさい」と言われました。報告書と辞表を持って師長室へ行くと、彼女は報告書だけ受け取り辞表を破り捨て、「なにぼさっとしているの！患者さんが待ってるわよ。あなたじゃないとだめだって土日の間他の看護師を受け入れないの。頼んだわよ」と。

そうやって私を呼んでくださったのは受け持ちの患者さんだったのです。

部屋をたずねるとすぐに患者さんは「あなた休むって聞いてなかったわよ。待ってたの」と優しくこえをかけてくださり、事情を説明して謝罪しましたら、「わたしは十年入院して一度も心安らかに眠れた事はなかったの、あなたが気遣かってすこし眠らせてくれたんでしょ。とても気持ちよく眠れたの、なのに目が覚めたらあなたがないから、あなたにはこれから助産師になる夢があるでしょ。この仕事を決してやめないで必ず前へ進んでね」と・・・ベッドに膝間づき涙が止まりませんでした。

その後、私は助産師の道にすすむべくその場を離れてしまい、患者さんは十年の闘病の末、その夏に永眠されました。最後の時に立ち会う事は出来ませんでした。患者さんはずっと最後まで私のことを気にかけてくださっていたと立ち会った師長から後にお聞きしました。

こうして文章で振り返ったことはありませんが、今、私の助産院でも色々な方の生き方とドラマがあって辛いことも悲しいことも沢山ある毎日ですが、時々空に向かってご冥福を祈ると共に「私頑張ってますよ」とつぶやくことがあります。

出会った患者さん達とまたいつかあの世で会って恥ずかしくないよう生きていきたいと思っています。

当時の医師とも数年して御縁があり、先生から「その節は君にすまないことをした。申し訳ない、ずっと伝えたかった」と。

先生にとっても何年も苦しかったことを察しました。

私達医療者は看護師や助産師である前に人でなくてはならない。診せていただく方には、私も愛する家族があるように、その人を愛する人が大勢いる大切な人だと思いうようにしています。

産科においては助産所の業務ガイドラインができ、助産師自身にとっても職能や、妊産婦さんを守る道筋が整備されてきました。しかし医療連携をとると言う中での信頼関係の構築は大変厳しい現状があります。

豊田さんの志をしっかりと胸にとめて誠意のある仕事として続けていけるように努力していきたいと思います。

ご講義ありがとうございました